



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

重症の中絶後遺症候群

「自分の子が死んで何とも思わない母親は、どう考えても病的だ」

中絶に伴う精神状態は、経験者が罪悪感を持つか否かという点に議論が集中している。中絶賛成派は、中絶後、深刻に悩む女性はごくまれで、大多数は何とも思っていないと断言する。このまま黙っていたら、最も非人道的な行為を見過ごすことになりかねない。良心の呵責を全く感じずに中絶できる人がいるとしたら、それこそ究極の心の病であり、すぐに対策を講じる必要がある。大切なのは、妊娠の実態をわかりやすく簡潔に、しかも説得力ある言葉で語る事だ。子宮は自然界特製の生きたベビーベッドで、赤ちゃんは、神の計らいであ

らゆる危害から守られるために、その中に置かれている。

「ベビーベッド」を「子宮」と言い換えてみれば、悲しみを表に出すか出さないかは別としても、生まれたばかりの赤ちゃんがベッド(=子宮)で死んでいるのを見て、何とも思わない母親など想像し難い。こんな例をあげて悲愴感を押しつけたり、取ってつけたような罪悪感を抱かせたいわけではない。しかし、自分の子が死んで何も感じない母親は病気にほかならない。しかも、お金を払ってまで殺す手筈を整えるほど重症の。女性をそんな究極の行為に走らせる思まわしい事情や、それを認める法律は別問題としても、母親には何か感じてほしい。何とも思っ

ないという答えだけは聞きたくない。

角度を変えれば、環境保護団体が、森林伐採、アザラシの受難、イルカの死滅などの問題へと人々の関心を高めようと働きかける事にも通じる。世論調査は不思議なことに、大多数を占める無関心派については触れようとしない。再認識や安心材料として取りざたされもしない。それどころか、深く根づいた無関心さは、さらなる詰め込み教育や意識の高揚が必要であることの証明と見なされる。無関心でいては何も解決しない。それに、無関心でいること自体が問題だ。

ごく一部には、人を殺して何とも思わない人間が存在する。精神病患者がまさにそうだ。病状をよく理解したなら、患者の行動がつかめ、偏見を和らげる事もできるだろう。だが、彼らに反省の色が見られな

い事を精神適応の証しと考えるのには賛成しかねる。死刑囚の看守なら立場上、許されて当然だが、銃、絞首、薬物注射などによって死刑執行する人間が、平静を保っていて当たり前とは、誰も思わないだろう。極悪犯やその死刑執行人さえも、他の人間の死には動じるはずだ。医師を雇って墮胎し、罪悪感などなく平然としている女性。彼女たちの選択を避けられないものだと主張する、理屈固めの中絶自由主義者をなぜ黙認するのか？それが正気の間が考えることと思いませんか？まじいのか？母親が動じなければ、誰も死んではいないし、何も失っていないと結論づけもしやすい。まるで、中絶自体がたいした事じゃないと言わんばかりだ。だが、母の涙すらもらえない子どもは、運命は？

中絶を心から悔やんで

いる女性にできる限り手を差し伸べる事で、うわべだけで傷心を装っている女性にも歩み寄れるだろうか？少なくともこれだけは確かだ。生まれていても、生まれていなくても、

「もう一度、父母の愛と心を子に向けさせる」ことが預言者の使命である。「ルカによる福音書」1:15-17、マラキ書3:24

Issue5-6/1994

親と10代の性

Part 3

『バランスある親の重要性』

親の重要性

親が自分の子どももの性を考える時、次のような両極端な事を思う人が多い・・・「子どもを押し入れに閉じ込めて外界からたとう」とするか、あるいは、自分も好き勝手にやって来たけれどまあまあ大人になっていくから、子どもにも自由にやらせる」かのどちらかである。

若者には成長・発展するために体系が必要だ。この体系の度合いは若者の成熟度や親とその子どもの性格によって異なる。統計によれば、穏やかなしつけをした親の方が厳しすぎる親そして不幸にも反抗を招いたりやだらしのない親によって親と子の境界

線を失ってしまつよりも性体験を遅らせる点で成功しているようだ。

『親近感のある親』

親は子どもが直面している挑戦に気がついていく。ほとんどの親は自分の子を深く愛しており、子どもの為に最善を尽くしたいと思っているが、どのような役割を果たすべきか分からずにいるのも事実である。親は他の親の助けを必要としている。「自分だけが門限を課しているわけではない」という保証を得たいのだ。

一方、子どもはできるものなら親に頼りたいと思っている。しかし、だからといって親は常に「いい人」でいなければならぬかと言えそうではない。親は威厳を持って子どもに接し、子どもが独立した大人になれるようついでに

いに指導して行かなければならないのだ。

中・高校生のしつけは、

幼い子どもをしつけるのと異なる。十代の親は「コーチ」である必要がある。「コーチは明確で一貫した方向性を持って、何度も教えなければならぬ。子どもに人生の方向を教えるのである。そのため手助けになるであろうと思われれる事を以下挙げてみよう。

- 1 親子間の信頼とコミュニケーション
- 2 愛情を持って養育する。自分の子どもを尊重する。
- 3 明確ではっきりした指示をだす

基本的規則

* 相手を傷つける呼び方をしない。

* 卑劣なことをしない：つまり、人の弱点に触れたり、攻撃したりしない。

* 三日前の事には触れない。今、直面している事をその都度つ。

* 議論するいずれかが空

腹、立腹、孤独、疲労、あるいは病気の時、重要な話題を避ける。

* 「いつも」とか「決して」しないといった言葉を避ける。

* 関係のない兄弟や友達などを話題の中に持ち込まない。

2 愛情を持って養育する。自分の子どもを尊重する。

3 明確ではっきりした指示をだす

「部屋を片づけたの？」と「ちらかっている服、雑誌、テープなどをすべて夜七時までいきちんと片付けなさい。」に違いのある事がわかるだろう。

4 一貫性を保つ。

「それを毎日、夜7時までによ。毎日必ずやるのよ。」

出掛ける前に必ずね。」

5 実行

*子どもがきちんと作業や振る舞いを理解するまで教え続ける。

*良い行いは強調してほめてあげる。

6 一責性と実行性を特に重んじ、子どもと議論して口げんかしない。子どもがなぜ門限が十二時じゃなきゃいけないの」と言うとする。その時の親の返事は「うんうん」である。あるいは「うんうん、前にも聞いたわ。」とか「ほかにもまだ何か?」である。このように言えば話題の内容に触れつつも、けんかしたり、子どもの気持ちを否定したりしなくて済むのだ。

*「転向装置」…言い合いが激しくなってきたら、今度は子どもに議論をコン

トロールさせるのではなくて、親が「転向装置」を使ってみると良い。

子「みんな十二時まで遊んでるのに。」

親「それでもあなたは十時までで帰ってくるのよ。」

子「でもお姉さんは私と同じ年の時、十二時まで良かったじゃない。」

親「それでもあなたは十時までで帰ってくるのよ。」

この「転向装置」は議論めいた感じにならずに、身近で問題に触れていられる。

『親の役割』

1・子どもが貞潔で過ごすよう期待する。

2・貞潔の価値観を教えるのは親の責任であると自覚する。

結婚前の貞潔に対する

価値を話し合う。

家族の強い絆を築くためにはかなりの労力が必要だが、それだけの価値がある。

『強く、健全な家庭』

社会科学の分野において、強くて健全な家庭を定義づける基本的約束がいくつかある。以下が、研究者たちの定める健全な家庭に見られる特徴である。

コミュニケーション
個人個人の成長を促進する

感謝の心をあらわす
家族に対する責任感
宗教的/精神的指導
社会との関わり

成長により適応する力
明確な役割分担
一緒に過ごす時間「量・質共に」

このような家族が健全だという理由は、何も問題が存在しないからではない。

く、危機に直面した時でも建設的な方法で解決する力があるからなのである。次号では具体的な例や方法を挙げながら、親が子どもに精神的成長と関わって行く時の手助けとしたい。

「続く」

『日々の生活を通して』

『日々の生活を通して』

命の尊さを伝えようとする時、私達は決して生活の中での実際の例を過少評価してはいけません。一九九一年に、私は生命擁護のメッセージを広めるための新しい手段を見つけました。私達の待望の初めの子どもの誕生に際して、私の妊娠が他の人達と生命擁護のメッセージを共有するための媒体となりました。

妊娠七週間のときに、私はクラスで妊娠していると伝えました。このニュースを伝える事による不安だけでなく、朝のむかつきも起こり、私の不快感はピークに達していました。午前中の授業の途中に教室を飛び出さざるを得ないことが何日もありました。

ある朝、一人の問題児が私のために塩味のクラッカーを持ってきてくれました。そのとき、私の妊娠が生徒たちに与えている影響力の大きさに初めて気がつきました。「ジャクソン先生、うちのお母さんに先生の赤ちゃんのことを言ったら、クラッカーが朝のむかつきを解消してくれるって言うていたよ」とその子は言いました。私は彼にありがとつと言い、彼がどれだけ私の赤ちゃんを気遣ってくれているかを知りました。このティーンエイジャーは赤ちゃんを決して、組織の固まり「だなんて言いませんでした。妊娠のどの段階にしようとも、生徒達は私の子どもを小さな人間と見なしてくれていました。」

日が経つにつれ、私の妊娠に興味を示す生徒の数が増えていきました。医者に行つて戻つた後、赤ちゃんはどんな風に見えたか、

医者は赤ちゃんの何を診ていたのかなどの質問を生徒たちが私にしてきました。

私は発育途中の赤ちゃんの写真を持つて行きました。「かわいい足」の複製もクラスに持つて行きました。どれだけわくわくしながら私が赤ちゃんの鼓動を聞いたかを生徒達に話しました。生徒達は質問をし続け、何人かは納得のいく答えを見つけてました。「選択の自由（中絶に關して）主義」であることを誇りに思っているある女の子がとりわけ優れたコメントを言いました。発育途中の赤ちゃんの写真を見た後、その子はこう言ったのです。「いったいどうして、誰が中絶なんかできるのかしら？」母の日の三日前、私と主人は赤ちゃんを失うかもしれない事態に直面せざるを得なくなりました。この身近で悲劇的な事件が、生徒た

ちが本当に私の赤ちゃんを思ってくれているのだという私の確信を固める事になりました。主人と私は山ほどの電話、カード、花束、そして祈りを受け取りました。母の日に小さなバラの花束が届きました。それには、「私達の赤ちゃんをよろしくお願いします。あなたの同僚と生徒たちより」と書かれていました。

学校の年度の終わりが近づき、休暇のため家に帰る前に、何人もの生徒が立ち寄つて赤ちゃんに別れの挨拶をしにきました。彼らは、赤ちゃんが産まれたら知らせる約束を私にさせました。「私たちの赤ちゃんに会いたいです。実際にこの子は私たちと育つたんですから」。確かにその通りなのです。そして彼らのこの言葉が、受精の瞬間から始まる命に対する彼らの感謝の気持ちを表していました。この生

徒達がメディアから何を学んできたにせよ、どんなに胎児が小さくもろいものであつても、愛し守る価値のあるものだということに気がついたのです。

生命擁護活動の中で最大の、勝利は、「形式的な教育からではなく、実際の例から得られる」と私は信じています。妊娠の喜びと生命の奇跡を生徒と共有する事によって、私は何人かの改心者を勝ち取る事ができたのです。

敵が私達よりも強力な武器を持つていると考える必要はありません。私達の秘密兵器は胎児なのです。子宮の中にいる赤ちゃんが「誰か」なのであり、一人の個人であることに気がつけば、ほとんどの人は愛情と哀れみを持つて接するようになるのです。私達のメッセージは事実、愛のメッセージであり、最後にはこれが全てに打ち勝つことになるので

す。

命の贈り物

アンドレア・ヨー・トロスキ (Andrea Jo Troske) は母親の葬式を覚えていたことはないでしょう。でもそのうち母の愛がわかるようになるでしょう。アンドレアの母親、メアリー・ヨー・トロスキ (Mary Jo Troske) は妊娠五ヶ月のときに極めてまれなリンパ癌と診断されました。

彼女は、化学療法を開始するために、赤ん坊を墮ろす必要があると医者たちに言われました。それで彼女はマヨ・クリニック (Mayo Clinic) ・アメリカの有名な病院) に行き、そこで実験的な治療を開始しました。その医者はその治療によって彼女の赤ん坊が傷つけられることはないと保証してくれたからです。彼女は毎週マヨ・

クリニクに通い、陣痛を誘発させてアンドレア・ヨーが健康な赤ん坊としてこの世に誕生した一九九一年の十一月まで通い続けました。

Issues 7-1993

この一人に

意味がある

一人の若い男が海辺を

歩いていました。遙か先の方にかすかな人影を見ました。その人は数歩歩いては休み、身をかがめ、何かを海の中へ投げているのです。好奇心を持ったその男は、砂に足をとられながら急いで、その人影に追いつこうとしました。近づく

ヒトデを拾っては海に投げつける為に、一歩か二歩歩いては止まっていたと、

わかりました。若い男はその時初めて、何千ものヒトデが、海岸に何マイルにもわたって、潮によって打ち上げられ、散らばっているのを、見つけたのです。

若い男は怒りが込み上げて来るのを感じました。老人のしている事は、全く無意味に見えて、早くそれ

を老人に伝えたくて仕方ありませんでした。若い男が老人と並んだ時、「このすべてのヒトデを救うなんて出来ませんよ！無駄ですよ！そんな事してどうなるのですか？」とあ

えぎながら言いました。老人は、今拾ったばかりの堅いヒトデを見つめながら、「こいつにとっては重要な事だ」と彼は言い、ゆっくりと慎重にそれを海へ、命へと投げ戻したのです。

私はこの話の作者に名誉を与えられたら良いの

にと思います。

私は、キリスト教信者の家庭に育ちながら、反抗的であつた女性を知っています。彼女は、両親の認め

ない若い男性と付き合ひ、両親の反対にもかかわらず、彼との関係を続け、数月後、駆け落ちし、出身地のテネシー州から、すぐに

結婚出来るミシシッピ州のコーリンスへと渡りま

した。彼女は十七才で彼は

十九才でした。しかし、結婚したその夜から、彼女がとんでもない間違いを起こしたと知りました、何故なら暴力がその時から始まったからです。

両親の言葉が、毎日のように耳の中で鳴りました。

「私達の家系には離婚はなかった。」彼女が居る場所

を電話で連絡すると、両親は、自分で選んだ道は責任

持つて進みなさい。」と言

いました。そして彼女は出来る限りそのように努力

しました。幸せな時もありましたが、それは少しずつ

減つていきました。そして最悪の事が起こりました。

彼女は妊娠したのです。高校生の知識しかなく、親戚

や親から何百マイルも離れ、彼女は一人ぼっちで捨てられたように感じまし

た。彼女の夫はとても嫉妬深く、教会へ行くとも男の人

達が彼女を眺める、と思ひ込み、行けないように車からエンジンの点火栓を外

してしまつ程でした。私は必死だった、と彼女は目に

涙を浮かべながら私に言

いました。子どもも又虐待

されるようになる、とその

時すでに彼女はわかつて

いたと言います。もし四十年前のその時代に中絶が

可能であつたら、彼女は迷

う事なくそうしたでしよう。彼女の恐れは現実化

し、夫の怒りは時々、子どもに向けられ始めたので

す。夫は長い間家を空けるようになり、彼女は家具や

家財道具を売つて、食べ物

を買いました。そしてもう一人子供が産まれました。

夫は外に数人の女を作つて彼女を裏切り、家に

帰ると、その人達が彼女より若くてきれいだと言

うのでした。彼女は女の人達にダイヤモンドやエメラル

ドの指輪を買い、彼女はお金がないので、新聞紙を折つて、小さくした布に入

れ、生理用ナプキンとして使つたのでした。離婚訴訟

を起こすのに必要な費用を貯めるまでに、十七年もの長い月日がかかりました。でも、夫の精神的な病気のせいで、一銭の離婚手当も養育費も受け取れませんでした。

将来をつらいものとして見越してしまい、それを防ぐ為に殺してしまおうと考えて私は困惑します。そして私にすれば、いつ生命は始まるのか、などということとは、次の真実に比べれば全く重要でないのです。人生は一人一回きりなのです。聖書はこのように言っています。人間は一度死ぬように定められている、そしてその後裁かれる。生まれ変わりは有り得ず、生きる「二度目のチャンス」はないのです。神はすべてを良くして下さる、というローマの信徒への手紙 8

：28の、真実の本当の目撃者として、私達の人生の中にあるのです。簡単に言えば、私達は生きないより生

きた方が良く、という事です。

中絶の統計値にはただ驚くばかりです。その数には、打ち上げられて、どうしようもないヒトデがまき散らされている、何百マイルもの砂地の光景のよ

「ライオン・C・スコット」

真実を伝える

六十年代に生命擁護活動が始まった頃、我々の発言には明快さがありませんでした！我々は赤ちゃんの事を話し、中絶が誰かを殺しているのと知っていました。そして、その事を自信を持って言えました。疑問を持つている人達に、胎児の発達の写真や中絶によって殺された子の写真をみせて、我々の主張の正しい事を示していました。

でも、今日までの間に何が起きました。あの頃は効果があったのに、今は効果がない事があります。その事を考え直す必要があります。中絶は単なる社会的なデイベートになっ

人殺しの事例について話しているのです！政治家たちが、自分たちは「中絶に反対」であると言いながら、そのすぐ後にどの子どもが死ぬことを許されるべきかのリストをつくるのは、このためなのではないでしょうか？一部の人が、避妊は中絶とは何の関係もないと言うのもこのためなのではないでしょうか？彼らは、避妊用のピルで人が死ぬという真実を語ることを本当に恐れているのでしょうか？

もしあなたが悪と戦いたいと思っている場合、まず真実を知る必要があります。そして次に勇気を持ってその真実を語り、守る事が必要です。

今度、あなたの知り合いが、「中絶問題」はうるさくて複雑すぎると言ったら、なぜ罪のない赤ちゃんがその親のために自分の命を犠牲にしなくてはならないのかと聞き返して

みましよう。もし父親が強姦犯なら、その赤ちゃんも罪人なのではないか？もし親戚が父親なら、その子ども罪人なのではないか？その人がどう答えるか観察してみましよう。中絶された赤ちゃんがどうなっているか実際に話し始めると、今まで中絶について真剣に考えなかった人達も、多くの場合考えが変わるようになります。

なぜ我々が罪のないものを守るのか、その理由を簡単に述べる事ができた頃を振り返る必要があるのかもしれない。そして、そこからまた始めるのです。なにも複雑な事などないのです。

我々は生命擁護家で、罪のないものの命を奪うことに反対です。これがそんなに難しいのでしょうか？